

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 24 日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770311

研究課題名(和文)インド洋西海域世界の比較研究：資源利用と管理にみる多民族共存と環境・生活影響評価

研究課題名(英文)Comparative Studies on the Western Indian Ocean World: Environmental/Lifestyle Assessments on the Multi-ethnic Coexistence Seen in the Resource Use and Management

研究代表者

中村 亮(NAKAMURA, Ryo)

国立民族学博物館・民族文化研究部・外来研究員

研究者番号：40508868

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：スワヒリ海岸と紅海沿岸のイスラーム海村における比較研究より、インド洋西海域世界の漁民文化の動態と現代的課題を解明することが研究の目的であった。近年の市場経済の浸透や、環境保護政策などの実施による急激な社会変化が、アフリカ海村社会に共通の問題である。魚需要増大による流通形態の変化によってスワヒリ海村の経済活動は活発化している。しかし同時に、島内での魚消費が減り、魚の贈与の慣習がなくなるなどの問題も浮上してきた。海洋保護区でもありユネスコ世界遺産サイトでもあるスーダン紅海北部ドンゴナブ湾では、水深に応じた資源利用に着目することで、漁民と保護動物ジュゴンの共存型海洋保護区の構想が得られた。

研究成果の概要(英文)：The aim of the study was to clarify the dynamics and contemporary issues among the Islamic maritime society in the Western Indian Ocean World through comparative studies between Swahili and Red Sea coasts. The common issue in African maritime societies is rapid social changes influenced by the penetration of market economy and the implementation of environmental preservation policies. In the case of a Swahili society: Kilwa island, the increased demand of food fish has encouraged the economic activity especially that of women. However, at the same time, new problems have occurred; the fish consumption decrease in the island and the radical reduction of the Islamic gift custom: sadaka. In the Dugonab Bay MPA placed at the Northern Sudanese Red Sea Coast, the framework on a 'harmonious coexistence MPA' between fisheries and protected animals such as Dugong has been obtained through the study on coastal resource uses according to the water depth by fishermen.

研究分野：文化人類学

キーワード：資源利用・管理 多民族共存 海洋保護区 漁民文化 ジュゴン インド洋西海域 スーダン タンザニア

## 1. 研究開始当初の背景

若手研究スタートアップ(20820067: H20-21)、若手研究 B(22720336: H22-24)により一貫してスワヒリ海村社会の資源利用と多民族共存について研究してきた。その結果、1) 国際交易都市の歴史をもつスワヒリ海村は多民族社会であり、2) 民族に応じて居住空間・生業空間・資源利用を棲み分けることにより、バントゥ起源の内海漁撈とアラブ起源の外海漁撈の二つの漁撈文化をもち、3) それによって限定された空間と資源のなかで多民族の平和的な共存を達成していることが解明された。

紅海社会の文化人類学研究は少なく、本研究はその学術的空白を埋めるものである。スーダン南部ベジャ社会について研究した縄田浩志をプロジェクト・リーダーとして、地球研プロジェクト「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究」による紅海沿岸域の研究が実施されてきた。研究代表者はこのメンバーとして、かつ、嶋田義仁(名古屋大学教授)の基盤研究 S「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究」の研究分担者として、2008 年よりスーダン、エジプト、サウジアラビアの海村調査を開始した。

紀元前よりインド洋交易の海上ネットワークでつながり、民族・文化の交流史をもつ両地域を、「インド洋西海域世界」として文化人類学的に比較研究できないかと考えていたところ、生態基礎と、船の文化(種類、構造、機能、部位名称など)を軸として比較研究できる公算がたった。

多民族社会のキルワ島では、三つの棲み分け: 居住空間、生業空間、資源利用を基調とした多民族による平和的な共存が達成されていることが「生態基礎図」をもとに解明された。タンザニアにおけるトップダウン型の沿岸環境管理/観光開発プロジェクトが、キルワ地域の住民に受け入れられなかったのも、民族に応じた生業空間と資源利用の棲み分けが存在していることをきちんと理解していなかったからであった。インド洋西海域の沿岸部開発においても、以上のように伝統的な資源利用を生態基礎図により解明することで、新しい資源管理(海洋保護区)と住民生活(漁撈活動)との関係の動態について考察する必要があると実感した。

生態基礎図と船の文化による比較という研究方法が想起されたことにより、文化人類学によるインド洋西海域世界での比較研究という壮大な研究計画の着想に至った。

## 2. 研究の目的

スワヒリ海村社会と紅海社会の比較研究によ

って、インド洋西海域世界のイスラーム海村における伝統的な資源利用と多民族共存のメカニズムを解明する。その成果より開発による自然・生活環境の悪化が懸念されるアフリカ沿岸地域における、住民生活の改善・向上を担う開発プロジェクトへ文化人類学の知見より貢献することが研究の目的であった。

伝統的な資源利用と多民族共存についての研究成果は、現地研究協力機関をつうじて、開発プロジェクトへすみやかに提言される。研究成果の現地社会への還元とともに、紅海における主要研究機関であるスーダン紅海大学の若手研究者との共同研究により、若手研究者の育成も期待した。さらに、アラビア語・スワヒリ語・英語によるフィールドワーク教材の開発により、教育に貢献してゆくことも研究の構想に含まれる。

## 3. 研究の方法

東アフリカ・スワヒリ海岸の海村社会と、紅海沿岸の海村社会において、現地調査を基調とした比較研究を実施する。

研究の基本方針は、現地研究協力機関との連携のうちに現地調査を毎年度実施し、その研究成果を多言語(スワヒリ語、アラビア語、日本語、英語)で公表することで、現地住民と研究成果を共有し、フィードバックを得ながら研究を進展させてゆくことである。

研究項目は次の三点。1) 各海村社会における海環境と民族に応じた資源利用についての「生態基礎図」の作成。2) 船を軸としたインド洋西海域世界の漁撈文化の比較研究。3) 環境・生活影響評価: 伝統的な資源利用(漁撈)と新しい資源管理(海洋保護区)の関係にみる生活文化と社会構造の動態。

地球研「アラブなりわいプロジェクト」と基盤研究 S「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究」のプロジェクトに関わる国内外のアラブ地域の研究者(社会・自然科学者)、NGO 関係者、プロジェクト・マネージャーなどと意見交換することで、研究期間中に最大限の成果あげることを目指す。

## 4. 研究成果

東アフリカ・スワヒリ海岸と紅海沿岸の海村社会における比較研究より、インド洋西海域世界の漁民文化の動態と現代的課題を解明することが研究の目的であった。その際に着目したのが、伝統的な資源利用と多民族共存のメカニズムである。

近年の急激な市場経済の浸透や、環境保護政策の実施による社会変化がアフリカ海村社会

に共通の問題である。本研究により、市場経済の浸透によるスワヒリ海村経済の急激な変化が明らかになった。また、海洋保護区でもあり、2016年にユネスコ世界遺産(自然遺産)リストにも登録されたスーダン紅海北部ドンゴナーブ湾においては、漁民と保護動物ジュゴンの共存型海洋保護区の構想が得られた。

### (1) 市場経済の浸透によるスワヒリ海村社会の変化

冷蔵設備の普及が遅れているスワヒリ海岸の小海村では、長年、鮮魚を干物(乾燥魚 *samaki wa kavu* や塩干魚 *ng'onda*)に加工することで「保存」の問題に対処してきた。しかし近年、都市部や内陸部での魚需要の増大や、流通インフラの整備によって市場が遠隔の大量消費地へとつながったことにより、海産物流通の形態が変化してきた。

キルワ島では2007年頃より、島の女性による「揚げ魚 *samaki wa kukaanga*」商売が盛んになってきた。これは、女性が浜(漁師の帰港地)で鮮魚を現金で買い付け、自宅で揚げ魚に調理し、島外で行商するものである。2010年以降、平均して毎年3人の新規参加者があり、2016年1月当時、キルワ島には27人の女性揚げ魚商人がいた。ある女性は、2015年12月21~24日の間に揚げ魚商売で76,000 TZSの利益を得た。単純計算で30日間に570,000 TZSの利益が見込め、これはタンザニア地方公務員の月給(300,000~600,000 TZS)と比べても少なくない。揚げ魚商売の利点は、女性の現金獲得の機会が増えるだけでなく、漁師にとっても帰港とともにすぐに漁獲を売り、現金を得ることができる点である(大抵の場合、魚は信用取引ではなく、即時現金で取引される)。

2013年に、28歳のイスラーム教師Mによってキルワ島で初めての鮮魚商売 *biashara ya samaki wa bichi* が始まった(図1)。島には電気がないので、アイスボックスと対岸の製氷所で購入した氷によって魚は保冷される。Mはキルワ島の20人の漁師と魚の専売契約を交わしている。その他、島外の3人の魚買付人から鮮魚を集めている(買付人はそれぞれなじみの漁師を抱えている)。魚の買い取り価格は、魚を安定して集めたいMの意図や、儲かることへの嫉妬を回避するために、高めに設定されている。鮮魚は、大都市ダルエスサラム(島から340 km)やナングルクル(30 km)のバスターミナルの食堂に運ばれる。とくにナングルクルの食堂には毎日70 kgの鮮魚を卸している。

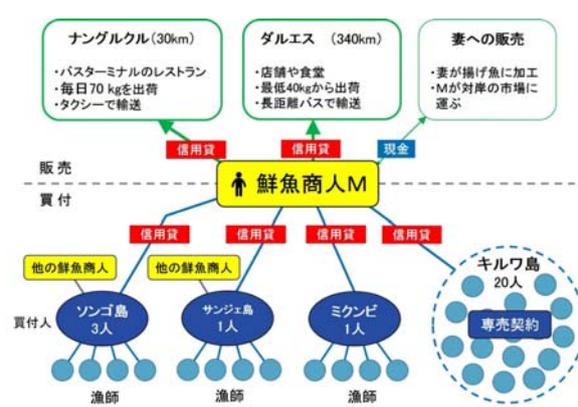


図1. 商人Mの鮮魚商売の構造

揚げ魚や鮮魚商売が登場する以前は、「干物」が主流であった。キルワ島には魚の大きさによって9種類の干物(乾燥魚と塩干魚)がある。干物の利点は、①一年ほど保存できる、②軽くなるので運搬に有利、③発酵食品(塩干魚)独特の味わいなどである。干物は、交易品と食品として島の生活に根付いている。しかし、鮮魚商人Mの魚買い取り価格が高額なため、干物商売が衰退してきた。体長20 cm以上の魚は、干物に加工するより鮮魚として売ったほうが得だからである。利益が出るのは小さな干物3種類のみであり、大きな干物をつかって売る漁師が減ってきた(2017年1月には2人)。

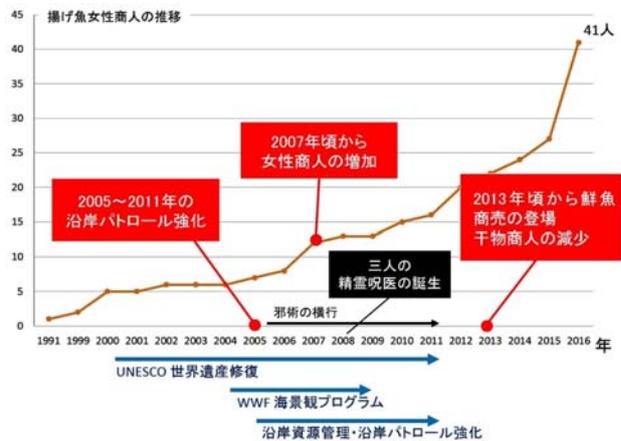


図2. 女性商人の推移とキルワ島のおもなイベント

- ・ 2005年に沿岸パトロールが強化されたことにより、漁具を没収され失業した漁師が増加
- ・ 2007年に「家計を助ける」という理由から揚げ魚商売を始める女性が増加
- ・ 2016年に鮮魚商人Mが拠点を対岸の町に移したことにより、Mと専売契約を交わしていた漁師が女性商人と専売契約を交わすようになった。これにより、揚げ魚商売への新規参加者が2016年以降に急増

2016年に27人であった女性商人は、2017年1月には41人に急増していた(図2)。魚の商品価値があがり、島外での魚販売が促進されたこ

とで、生産地である島の一般家庭の食卓に魚がのぼることが減った。今や魚は店で購入するものである。かつてのような余剰漁獲のお裾分けの慣習：隣人、老人、寡婦への魚の日常的な魚の贈与 *sadaka* が激減している。

市場経済の浸透は、スワヒリ海村社会の生活を金銭的・物質的に豊かにしている。しかし海村経済の発展は、沿岸での漁獲圧を高めることにつながる。持続的な水産資源の利用と適切な管理が、世界的な水域環境保全の動向と重なって、今日のスワヒリ海村社会における重要な課題となっている。

## (2) 漁民とジュゴンの共存型海洋保護区

ドンゴナーブ湾 (21°06N, 37°07E) は、面積約 285 km<sup>2</sup> におよぶスーダン紅海沿岸で最大の湾である。ドンゴナーブ湾が海洋保護区とされるのは、その半閉鎖湾の地形的特徴や、サンゴ礁、海草藻場、マングローブ (*A. marina*) の豊かな生態系が、多様な生物の生息地となっているからである。また、紅海に 4000 頭しかいないと推定されるジュゴンの希少な生息地でもある。

漁師とともに 77 箇所の漁場の位置と水深データを記録した結果、水深が 30 m 以下の漁場が 84%、海底質が造礁サンゴの漁場が約 71% であることがわかった (図3)。

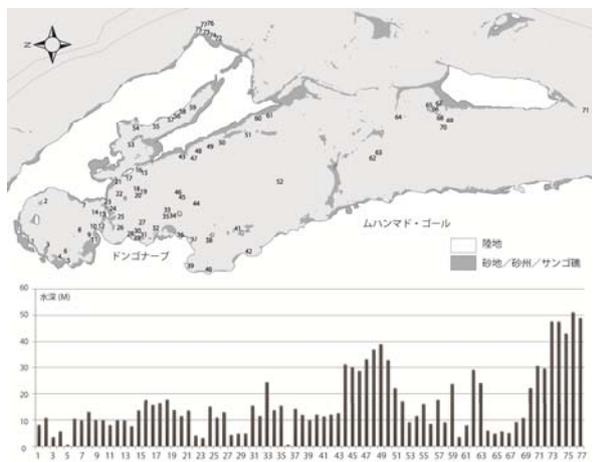


図3. ドンゴナーブ湾の漁場の分布と水深

水深 30 m 以下の漁場が 84% (65/77 カ所) を占めている

湾外の水深 40~50 m の深い漁場は高級魚スジハタ (*Plectropomus maculatus*) の漁場である。この海域の漁撈活動は、サンゴ礁に生息する魚介類を主な漁獲対象とし、スジハタの漁期 (5~6 月) 以外は、湾内の浅い海でおこなわれる。

この地域では一年の大半の月に強風が吹く。漁師を困らせるのは、スジハタの漁期が強風の時期と重なっていることである。スジハタ漁期は約一ヶ月と短いところに、強風が吹くと操業可能

日数はさらに減る。また、暑期の 7~8 月には、魚が暑さを嫌い深い海に逃げていくので、漁獲量が減少する。

ドンゴナーブ湾の漁撈活動は、この海域の豊かな自然にささえられているが、自然はときとして厳しく、強風や夏場の気温上昇などにより、漁撈活動は強い制限をうけている。人びとの生活にとっては苦しい条件であるが、これが天然の休漁期間となり、資源の過剰利用が抑制され、ドンゴナーブ湾の生態系がまもられていると考えることもできる。

スジハタは、産卵期に集中して獲られているが、これも、不確実性が高く効率の悪い手釣り漁による話であり、スジハタが獲りつくされてしまうと考えるににくい。深い海には貴重な資源がひそんでいるが、漁撈の技術との兼ねあいから、その利用は難しいのである。注意したいのは、浅い海の資源である。沿岸定着性のナマコの乱獲が懸念される。

ナマコ (*Holothuria scabra*) 一つが 900 円という破格の価格ゆえ、普段は漁師でないものまで漁に参加する。ナマコを煮る薪として、希少なマングローブが使用されており、マングローブ伐採の問題も浮上してくる。さらに問題なのは、ナマコ漁の漁場がジュゴンの生息地と重なっている点である。ナマコ漁が住民の貴重な収入源であることを考慮すると、すぐに禁止というのは難しい。しかしナマコ漁には、ナマコ乱獲、マングローブ伐採、ジュゴンの生息地を脅かすなどの問題が含まれており、慎重に対応する必要がある。

これも浅い海に生息するジュゴンに関していうと、ジュゴン混獲防止のため湾内での網漁を釣り漁等の代替漁に変更する提案が出されている。しかしすべての網漁が混獲の原因ではない。現地調査から「夜中に海草藻場に仕掛けられるより糸製の置き刺し網漁」にまで混獲の原因を絞り込むことができた。

紅海沿岸ではジュゴンは、肉は食用、皮は盾に加工するなど、歴史的に利用されてきたが、今ではその需要もなくなってきた。ジュゴンがかかると高価な網が破損するので、ジュゴンをねらってとる漁師はいない。漁師とジュゴン双方のリスク回避のために、ジュゴン発見時には漁を中止することや、海草藻場での置き刺し網漁にはより糸製の漁網を使用しないという申し合わせは達成可能であると考えられる。この提案は、より糸製の漁網の使用を全面的に禁止するものではなく、投網漁や追い込み網漁など漁師が捕獲時に立ち会う場合には使用を認めるものである。

住民の生活改善・向上に主眼を置いた沿岸資源の保全については、漁民の水深に応じた沿岸資源の利用形態を理解したうえで方策を立

る必要がある(図4)。

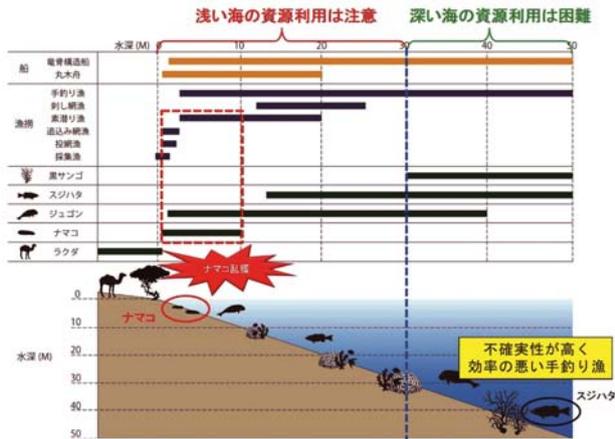


図4. 水深に応じた漁撈活動とドンゴナーブ湾海洋保護区における資源利用の課題

本研究成果を、スーダンにおける海洋研究の主要機関である紅海大学をつうじて政策に提言してゆくことが今後の課題である。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計9件)

- ①中村亮 2017/3「メンバーの研究紹介と研究成果」『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明』5: 249-271.
- ②中村亮 2017/3「東アフリカ・スワヒリ海岸キルワ島における精霊ジニ信仰」『宗教研究』別冊90: 136-137.
- ③中村亮 2016/5「飯田卓著『身をもって知る技法: マダガスカル漁師に学ぶ』(臨川書店2014年)についての書評」『アフリカ研究』89: 61-62.
- ④中村亮 2016/3「乾燥地の水辺の魅力」『沙漠学会沙漠誌分科会ニューズレター』4: 7-9.
- ⑤中村亮 2015/8「水辺の環境保全をめぐる二つの事例」『第20回水シンポジウム in ふくい報告書』pp. 108-112.
- ⑥中村亮/北窓時男 2015/5「特集にあたって: アフリカ漁民文化研究の視座」『アフリカ研究』87: 29-36.
- ⑦中村亮/Adel Momaned Saleh 2015/5「スーダン紅海北部ドンゴナーブ湾海洋保護区の漁撈活動とジュゴン混獲問題」『アフリカ研究』87: 77-90.(査読有)
- ⑧NAKAMURA, Ryo 2013 “Coastal resource use and management on Kilwa Island, Southern Swahili Coast, Tanzania”, *AWERProcedia Advances in Applied Sciences* 1: 364-370.(査読付)
- ⑨Adel Mohamed SALEH, Ryo NAKAMURA,

and Moamer Elraib Ali MOHAMAD 2013/10 “Resources Uses of Coastal Fisheries in Sudan”, *Abstracts of RIHN 8th International Symposium: Risk Societies, Edge Environments*, RIHN, p. 3.

### 〔学会発表〕(計16件)

- ①中村亮「アフリカ地域漁業の変化: タンザニア南部キルワ島に新登場した「鮮魚商売」の影響」地域漁業学会第58回大会、2016年10月30日、別府豊泉荘.
- ②中村亮「ダウ船から分かること: インド洋西海域の船の比較研究のこころみ」物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究(縄田浩志)、2016年10月8日、国立民族学博物館.
- ③中村亮「東アフリカ・スワヒリ海岸キルワ島における精霊ジニ信仰」日本宗教学会第75回学術大会、2016年9月10~11日、早稲田大学.
- ④中村亮「東アフリカ・スワヒリ海村の精霊信仰: 旧海洋イスラーム王国キルワ島の事例」アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明第5回シンポジウム、2016年8月5日、中部大学.
- ⑤中村亮「タンザニア南部キルワ島にみるスワヒリ海村経済の変化」日本アフリカ学会第53回学術大会、2016年6月4~5日、日本大学.
- ⑥中村亮「アフリカ漁民の資源利用と信仰: タンザニア南部イスラーム海村キルワ島の事例より」専門を超えて考え話し合う② 海からアフリカを考える、2015年2月21日、神戸大学.
- ⑦中村亮「アフリカ漁民の世界: 沿岸資源をめぐるインド洋西海域世界の比較研究」第207回アフリカ地域研究会、2014年12月18日、稲盛財団記念館.
- ⑧中村亮「スワヒリ海岸キルワ島をめぐる環境保全と精霊信仰」地域漁業学会第56回大会、2014年10月25~27日、三重大学生物資源学研究所.
- ⑨NAKAMURA, Ryo “Cultural and Social Changes impacted by the Environmental Conservation in the Coastal Region of Kilwa, southern Tanzania” *Japan-German SATOYAMA Forum*, 2014/8/31, Fukui, Japan.
- ⑩NAKAMURA, Ryo and Adel Mohamed SALEH “Maritime culture in dry land: Conservation and management in dry land coastal resources” *IUAES2014*, 2014/5/15-18, Makuhari Messe, Chiba, Japan.
- ⑪中村亮「乾燥地サンゴ海域の漁撈文化: スーダン紅海北部ドンゴナーブ湾海洋保護区の資

源利用」民族自然誌研究会第 73 回例会、2014 年 1 月 25 日、京都大学楽友会館。

- ⑫中村亮「乾燥熱帯沿岸域の資源の利用と保全:スーダン紅海北部ドンゴナーブ海洋保護区の漁撈文化」地域漁業学会第 55 回大会、2013 年 10 月 26~27 日、鹿児島大学。
- ⑬Adel Mohamed SALEH, Ryo NAKAMURA, Moamer Eltaib Ali MOHAMAD “Resources Use of Coastal Fisheries in Sudan”, *RIHN 8th International Symposium: Risk Societies, Edge Environments*, 2013/10/23-25, RIHN, Kyoto, Japan.
- ⑭中村亮「インド洋西海域世界の漁撈文化」アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明総合シンポジウム、2013 年 7 月 20~21 日、名古屋大学。
- ⑮中村亮「スーダン紅海沿岸ドンゴナーブにみる乾燥熱帯沿岸域の漁撈文化」日本アフリカ学会第 50 回学術大会、2013 年 5 月 25~26 日、東京大学。
- ⑯NAKAMURA, Ryo “Coastal resource use and management of Kilwa Island in the southern Swahili Coast, Tanzania”, *Global Conference on Environmental Studies (CENVISU-2013)*, 2013/4/24-27, Antalya, Turkey.

#### 〔図書〕(計 15 件、分担執筆含)

- ①中村亮 2017「隠された文化遺産:タンザニア南部キルワ島の世界遺産をめぐる観光と信仰」飯田卓編『文明史のなかの文化遺産』臨川書店、pp. 97-119.
- ②中村亮／アーディル M.S. 2015/3「乾燥地のサンゴ海をめぐる資源の利用と管理:スーダン紅海沿岸ドンゴナーブ村の漁撈文化」西本真一／縄田浩志編『サンゴ礁』臨川書店、pp. 285-324.
- ③市川光太郎／中村亮 2014/7「ドンゴナーブ湾におけるジュゴン混獲事例報告」市川光太郎／縄田浩志編『ジュゴン』アラブのなりわい生態系 7、臨川書店、pp. 179-188.
- ④アーディル M.S.／中村亮 2014/7「漁師とジュゴンの共存をめざして:スーダン紅海北部ドンゴナーブ湾海洋保護区のジュゴン混獲問題」市川光太郎／縄田浩志編『ジュゴン』アラブのなりわい生態系 7、臨川書店、pp. 163-178.
- ⑤中村亮 2014/4「アフリカで出逢った二人の篤漁家」縄田浩志／篠田謙一編著『砂漠誌』東海大学出版会、pp. 419-420.
- ⑥中村亮 2014/4「砂漠の海に生きる:スーダン紅海北部ドンゴナーブ湾の漁撈文化」縄田

浩志／篠田謙一編著『砂漠誌』東海大学出版会、pp. 305-311.

- ⑦中村亮／稲井啓之編著 2014/3『アフリカ漁民の世界』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 9、名古屋大学文学研究科、305 頁。
- ⑧中村亮 2014/3「アフリカ漁民文化への視点」中村亮／稲井啓之編『アフリカ漁民の世界』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 9、名古屋大学文学研究科、pp. 1-7.
- ⑨中村亮／アーディル M.S. 2014/3「沙漠の漁撈民:スーダン紅海北部ドンゴナーブ湾海洋保護区の資源利用と管理」中村亮／稲井啓之編『アフリカ漁民の世界』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 9、名古屋大学文学研究科、pp. 41-71.
- ⑩中村亮 2014/3「スワヒリ海村の干物考:キルワ島の海産物保存と経済戦略」中村亮／稲井啓之編『アフリカ漁民の世界』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 9、名古屋大学文学研究科、pp. 133-156.
- ⑪中村亮／縄田浩志編 2013/12『マングローブ』アラブのなりわい生態系 3、臨川書店、323 頁。
- ⑫縄田浩志／中村亮 2013/12「乾燥地マングローブへの視点」中村亮／縄田浩志編『マングローブ』アラブのなりわい生態系 3、臨川書店、pp. 5-19.
- ⑬中村亮 2013/12「スワヒリ海岸のマングローブの利用と歴史的役割:タンザニア南部キルワ島の事例より」中村亮／縄田浩志編『マングローブ』アラブのなりわい生態系 3、臨川書店、pp. 121-150.
- ⑭中村亮／縄田浩志 2013/12「マングローブと海辺の生態基盤の回復」中村亮／縄田浩志編『マングローブ』アラブのなりわい生態系 3、臨川書店、pp. 303-317.
- ⑮中村亮 2013/12「沙漠の海の魚つき林」中村亮／縄田浩志編『マングローブ』アラブのなりわい生態系 3、臨川書店、pp. 169-175.

#### 〔その他〕

ホームページ等

<https://researchmap.jp/uraibu/>

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 亮 (NAKAMURA, Ryo)

国立民族学博物館・民族文化研究部・

外来研究員

研究者番号: 40508868